



五元集
中



5
1834
2





借部上

上嘉佐野

得雷やのうら三見入る者
皇井よりけれの給子



傘おろ月おぼろしくも也

本母さふまの今あけのど

名月やる住者のつらき給

名不月

小くくくたつる月やぬる浮

雨

弱よめて金貫指りあふ月

川筋の園をふいらつる子

新日やいらもむくの男

水相観の繪

ふきまてよめをおもひのこ

名月や居酒のきしと頼り

得蟹無酒

懈を画てはま遠する月

名月や夏そのくも松の影

雨

納屋の海面吹吹さけお月

名月や舟を定むるむら

そらとよめ宗起て月の色

あはれん

更にと祢宜の斬や松の月

紀川いづれあや

きつらうあはれあや

所畏

ふしんしんあつとれ十四

名月や金くくひるあ雨の友

園のあは吉あはらり月あ

月あてははれはく小舟あ

人音や月んとぬは伏見村

維摩の伎

山のそへ大衆じりり床の月

張良圖

胸中乃出出るあは月

布衣の月を掬は

ありてあき水の月や瓜石

寺

ちの月あはう膾はあまもん

名月やくやくゆき油に怪

鳥帽子屋ハ急ハ
ホウレク
月

雨倚橋

猿遠子あはうや橋わ月

含杏亭

あま入星を元輝やきあは月

風雨

雷は振ハあはきこり月ん舟

小野川けんきあうは餞

入月や長巻を袋あはあは月

三日糧をくむはあ

名くく十歩は錢を握り

巴江

聲のれく後の茜白し暮れ月

舟中よふてふをみては暮れ月

日たるも杖よつふけり小舟

琵琶巴江あふむ

言わよ比巴を興へて夜も雨
陽のあはし思ひを酒をま
灯をききてはあふむ
村雨の心をありし私御の耳
をていふら感あるは十三
より字はさく曹保々秘曲
もはそふ人を泣くはあふむ

すさしものさつり子てと云り
其夜困あるはつて雨と色をひ
とむるものあはれてはあふむ
松を投出たるはあふむ情は
一藝何らやといふ

十五く酒をのこむとげあの日

あふむ舟よつふを合く
月をこぼす女の水干
扇のほろひはあふむ

あふむ舟よつふを合く

所懐 京よ

いとあふむ心よあふむ

母と月をけるふ

おそれまは雨乞政乃十三夜

旅泊

ふれまは江尾て三穂ゆ中二夜
葉研てハ粉炊かりすう島の月
住の江や夜芝居さそし浦れと
白玉子芋を交まやけり月
ほの目上の太子れあおれ
まうとすむ茶柳が旅泊の
あつと躍りけり日傘

十三夜を

やよみ月あつ初あき木松竹

田十五夜

あつ夜あつハ
は産あつハ

御番衣ハ照月をら
瀬河舞

平家
海月

宿あしのとては月を

紫少のあつハ

名月や鵜者人の心世流
名月や人を抱身を膝尻
待鳥山
てよみ満を棹のあつハ
あつ鳥

契不逢寔

圀の灯も光るを影や油の身

一休の狂詠自画を写し

甲申律師め相初を十一日茶

松前のさみ子中

送り侍り

こころも大根で 清さん 秋の月

十六宿の儒者と名をうけし

漬蓼の穂子 九月をき ちあふふ

日十三日

笈の葉子たつてきき日とて

病中制禁好

松柳乃津海氣をらすや月の友

秋宅ひ

ひ汲をわけてみさやけの月

案周の月をくらあつて

半く 元徳都の二百貫

てんしひひくんとあつてしひ

物うらとち豆くりに袖の月

鐘声ノ客船

名月や市堂の鼓の音ては

遊子の身あるな松の朧も江の月

鷹の如く弛を三れを身は月

玉律の陽を

わのいづつお井の月をおたよ
いさよひや龍眼肉りうし衣

上文詰上

平家こち系記の月記す

吉野のあやみせーしり

こよひにれすいんかこの月記
せそそりし月記

秋の月記所や九月を

九月廿七の月を惜

る月や大い思そぬ日を

石の家と合

又月や陰を感はる故屋の中

ちや暮るあよひ又て笛をす

屋合やいよよ瘦せの風つり

雨は

散や石をあり一の橋よみ

星名ぐら星お一星あひま

新居

塀楯をけりくお新河

天川けあのちじや一志海り

あふのさまで
確子をさすりくく星ハ地
伝花

刺精も廣くふ羽をうけり
笑ふに花つけたれおむ
二軍旅も隣のおもひ
かきまや丸ちのふよ
河一あひや
丸橋の治や

城敷ののりて
星阿比や双林塔
橋と成鳥ハいつ

七月の錢肅山子

あけては海ら
首花や角まも星

小娘の生は

中風吹く花火の筒のわき音
橋をこもるも逆橋もわき音
玉川のあき糸
玉火賣

水汲の曉起やすまの船

増上寺晚景

馬老燈籠使のたき入

まろくろくおろふま

形水の敷くよりのしほり傘

弄化生

あいらの子家と天川

柳徑よみあはれいづり傍の
袖よりおひあはれをなす
りの授記名の有無價宝珠
と説せぬよ心をちりて

衣あり襦きもらや玉より

永げ島よあそふ

慈山火を昔のまけや玉匣

あすうう門のし合り親とん

子のおし人や隣の玉より

得平酒

洲の隣あつめや生れ玉

桐陰下けありき北阿比
見る人もよふ竹籠中ロリ
送りも一室の輝十文字

千々よ 黄葉千々よ

念ふものゝわらふ二ん
稻つまやまのあふふ西

妻のあはれは
あはれはあはれは

らあしや馬あまらあも
伴勢の鬼のしあひる羅外
かよふあはれを

舟興

をあり花火あもあま
扇的も火くみする扇は

あまよる三つを

お新よらあある秋のせ
鬼灯のしをたつやせこの

悼コ齋

其人の軒はしあ秋の悼

投られて城をやらうけお撰

よき衣の降りやあさしん丸
ト石や志よこよぬれそせお撲

糸のしめかきも賣やお撲丸
相撲氣をば数日休の夕ふ
山城のすじ練ぬ形や活西風

遊品福寺

本居や六尺は人唐めり尼

中の御あそ

幸清り要の海つきや昔松

雨後二句

あそくくる芭蕉よのりて
群吟を雷お怒よつと
其舞の日陰ありあり中夫
舞の立ちのやああ物
舞のおや房をうけてお行原

種竹三年

竹乃色許由りひささよる情

つらとともてはあたり庭の萩

五言四句

長生を愛野にわたりて
角ふまやいせの飛鶴乃花屋
置ぬめりしつあや秋の暮
草の程や鱗をよこしておかし
客至

碧池汲少るの埒や夢のむ
暮暮とらふま

影影子あふふ年の夕
花もじし佐助の屋は花盛
酢をいあると隣の夢の花盛

三遠茶納

子稻酒や稲岸よんかた焼めを
病のちや海青あくおるる夜
頼抄やちもハ世人は虫包を

野店無肴核

足あふる亭るまを新酒
酒買子りるぬあの方紙

伊芽系あて

化野や焼のらにしの骨ハり

春日法楽

と哉日秋の若穂をとりけり
四所の宮の若穂をとりけり
成の刻をかりけり
野外夕虫とりけり
晴吟や狂ひ志つ下居るの月

相模川洪落水接天

狼の浮木ありや
二挺きの掃棹
髪をぬれ枕つ連ふし
星の影

新瓦や松よあけの清田

こぼしきの籠まで

甲斐駒や江さくくと柳おたう

駒や岩あかしく元管根

みのぬき入て素牛まで

破きし孫もなまき志津をま

何さ長者のもこと

中なる小孫ぬきましくしを破

初め新巻

さし椎の音を仕すハ礎りも
奥好乃殿やうんしんうら衣

きき里小野の虫はみほりて

音雨ハ屋ももれとねらう

華や樹葉の何との眉つくり

あしりのわくくり扇

関守の心ゆるすや栗かまは

大和のゆかり物いそ

泊瀬あふ柿の志よこを悲いかり

蓋源遊吟

清澄や流柿さりすあふ

葺狩や山の阿もゆこも虚も病

め中の葺うりて

葺狩や鼻のそあふもあふ

舟中

あし山の田生も並のや秋の音

秋のや弱もゆるね轡の上

稲葉んよ中待てくすこい何

煉のそえ 瓦上の移きもあふり

隅田高橋之記

饒新殿

遠野弱ふ海をぬる目よ
松虫の旅をんれを友とせし

はあきとせをうらりて

あつも隣をるをのちの巻
すむ日や舞をうらりて

夜る山

燈虫や松のてへへ荷をせて
山川や松のてへへ荷をせて
きりきりて山田の畔の夕舟

二見あて

岩のうへに秋風塵してれ落

長谷越

山畑乃草河るるもたに依れり
川昔のまをりあるや谷乃あ

遠野二役川を河舟よそ
りりりりり推河船をりあふ
逆水大切新をこころ

お權よ難はるるり淵の色

一夜前裁とらあを

河城のいゆ子入やらをいあ

切怨きうそて

日盛を帯筆とせ萩子汗

木の心音

萩子汗をひかりやササ葉

既松幸

獅子舞の胸分あやうさ萩の萩

楓子幸

あしひの雅の内併え

井筒を略しる昼よ

いそれうと竹輪をむす小雀あ

田家

度々の卵うみ控へる種うま

妻基小稲ちん窓へま減り

饒青流難後

若川のうらを喰せてし破り

隣家よもと控うらを

大絃ハ晒にえ結りある雁

元結のめる君はる虫の声

大序ニ帯の貝をさうて

あけ出乃見よもておは新酒か

帝香月灯を憐

古寺や 洗紙 あまの 所ふ

駿府席番よ 籠も あまの 所ふ

くうよ 妙楢 くも 木洗桶

日仙石玉葉 公席が 高き 籠の

萩すりや 傘に くは 昔鞆

あまの の くは の あ

花子 太 あ

三栗の くは ちり あ や 角被

在 あ 寺 あ まで

信 あ 軍 あ の あ 去 あ り あ 中 あ も あ の あ 蔭 あ 中

松の あ を あ 子 あ の あ 火 あ 走 あ け あ 為 あ 勢 あ 中

感 あ 徹 あ 和 あ 者 あ の あ 糸 あ 中

そ あ を あ 折 あ や 勢 あ 止 あ 玉 あ 中

品川 泛 鉤

唇 あ の あ 脈 あ 足 あ 送 あ り あ 中 あ や あ 舟 あ 上

白 あ を あ 子 あ の あ 遠 あ 出 あ り あ 中 あ の あ 唇

あ の あ 唇 あ を あ 吸 あ 中

貯 あ 啼 あ や 赤 あ 子 あ の あ 頬 あ を あ 吸 あ 中

泥 あ 檢 あ 子 あ の あ 聲 あ や あ 百 あ 舌 あ の あ 声

泥 あ 衆 あ の あ 時 あ 子 あ 遠 あ 中 あ の あ 声

曳尾

鶯か長上系

うづ花の枝や女を

如是果のころを

二子山二子ひねりし粟のう

尾別岸者まで

燕もおもひはらみうらて

賈固や音のげしきま

鹿の一声とらふうら

又うを誰かゆさく鹿の声

はばくやあまきよけ流

兼木ついで

川立の枝くわおち男鹿うま

小原やあまてとく蕙の尻

秋葉禪定の時

合衆あてあますすりあま

下山

うらなふ枝を投りあま

芭蕉あま岸蘭を悼める詞あま

嵐紫一子孤懸をたそねむ

早のうも芭蕉の秋をせがふ

めりつてつゆしつてさるる
おちあふきををあげく人々
かりつたふ八思ふあふさく秋葉

二月堂あまのりつる年七日
新倉の借堂のつらつら
いふことなきをいふ

日の目だめあはれまてつらに花は
甚五たあつたあつて

けん快狂さくせとつらつら
座安、故くつらつて

兼お糸をるるをいふ
あふり
り

戸越山庄

むら花柱の突をほしく白く

ふちりてあふあふ掃り花は

あさお山を

谷くつげ麻のおつた花は

三糸橋上

汗腕ハ都ののこに花はあふ

あふくんの花はあふ

お糸さハつらあつる酒のふ

お娘の涙うら流にわみあふ

管根

松の上よりそとくから村におも

高雄

は新嘗文算家をくせし

泊瀬

松は家の子をくせし

山形

及後にお家はくせし

いせ

お家いせ熊の拓といをせし

新公家
本家

南てやをのりて山はく

南天の穴を包めたり

南天や我をくせし

くらの山乃

水郡

唐相を流す水

旅思
卯句

富士

笠原と富士の音は遠く
おきや 雲を多きとる下風

背面達しを思て

西帝より留守とてしる
秋の風

旅思 二首

こつくの指をらや 秋の昏
みらこの路中へ人よせり
召てた訓ふ方や 花層
くちかやるも 餅より人の心

本多下総守の
席侍宴

後園

りきぬけの庭や 澄摺菊の糸
手の内を敷こゝれてさく秋露

旅行

駕籠を濡て山道の菊を三つ
志ありし子たを何何る菊の宿

荷合り後老い 旅行く

土室の菊をいさせや きの菊
きよの菊小侍て 志ありし子好
まくの菊や 靴よりあやうき

白鷺の墓石ありてささくのあり
重し地子這菊を先せん
こい誰より初めのころれ 袋菊
素堂 孫菊の原より

け菊より十日北園乃亭主あり
昼菊

さく白く蒼く梅ふくむり

菜苑

菊を切ぬ梅のころあうり

水鼻 ふくすめくぐり 兼 栞

病起 千山ヨリ菊ヲ
病起

大母衣乃りしを扱や靴の菊

三将めて重陽

門酒やまぬの腕乃さくをお

宮川のやぐり酒送せられし

重箱小花あそびの野 菊が

みちとせのころは名なむさくの巻
あひあひける子 おひひよりて

ゆくて我入七百のゆき 菊よをん

竹苑のやまあききき
うつらあききき花奇あきき

出世者乃りしを扱や靴の菊

翁はひそひの交むよにせり

時服そ菊あはさく此色也

十日菊

親世殿十日の菊をかきとり

女子を給うひそ

あけけらんひ

かみ尿よりうらふむの婦が

十日菊

震宴のおあまもあ菊 贈

笠きりら西りの曇り

菊を着てつらさあかや

袖の浦より貝つじよ

白菊を貝の内袋よせん袖の浦

那岐を丸帯れあつらふまこ

佛蓮さの良林ともあまひ

大工事の久しむ朝や神の秋

御富よりあてなまひ

脚程を死て髪あまの

内宮 法輝のを拜あまふ

刃の輝や赤子もおいる赤羽山

あま

日ハ照て古殿ハ旁のかくも

いつれもくわあま

たしや小判あつて葉のふ

平津川よそ

花江よ祭主の車を送りり

冠里公ゆりしすし祝まで

初度や其の場を以て百足持

周竹の蘆の昼よ

白鳥と一升入乃めく

栗家の妻を渡らふ

かつと来て福原漸く

元禄辛未のころ大山榎島へ

お川 紀りお書略之

品河もつねおめつじ

宿

箱塚の戸塚つづく田平

辰次

宿よりて来を回やくれの月

いせ

よあそをや離く乃書麦 畠

御向松よ

生栗を握はめしる 山後抄

大山

細押やうろ岩根乃りもせら

石崩る第僧

手ひ提し茶瓶や比めて暮あふ

二間茶釜をよそ

白くのはな愛ひさるるまきり

由井のばり

おきふ一のちもおや母のおと

雪乃り下もやとんそ

破うら宿の庚子や榮乃りお仕

羅思た下古樹のものとよそ

かー代の供奉の扇や ちる 報香

横儿追悼

一紙をよひ向ふとるや新巻

酒より初を切影しとる各

一字を探るゆまの問を

あいせを おを 比しての 宛 寐入

自画 雁

斤是ハやん 一 小田の唇

秋のら祖父の あ たり あ の そ

白扇倒懸東海天といへるを
つまびかりしきさみあてしよ
みきりしつらむせしるこのあし
をきき立おほひて山の半腰より
みりしをわらわを要よりすそと
いせんともなりのちりとして

白雲の西より来や普賢富士

未曉吟

澄つさよ階子ふ立てさう菊ハ

洞房の茶を象見生みの笛を

あけらりせしるを伴ふ

さうさや笛のふるハ蓬足履

あつたはらけはたはたにたか

悼朝叟

此人ふ三百十りのあはれ

吉田氏

唐柁も糸をさしらるる日向

芭蕉翁十三回

辰や秋や風尾の宮にさるる

室永三戌十一月廿二日
如身童女を葬りて
此の宮に土まかすも被さし

秋世月かろく菴くち室に
まゆや福宮の河原に秋世日
玉津路のそと

師弟を旅より函こしりるあそと
高野のそと十月三日

卯塔の花表やけのも秋無月
きりくは斤りりりやあゝあゝ
阿多寺けと時あむの聲の
あゝや葱臺乃 斤柳

芭蕉每三回

志くや此も舟泊を墓糸
帆上げ舟泊を也豊田の舟

遊金閣寺

八雲の楠の板戸をまわし
蓑をきて遊ぶことな夕

大和めぐり世比

あつ時を三輪の道なきう

芭蕉病床

吹井より病をすまひし時

大和めぐり世比

治柿の夕日りかたる舟

飼猿乃引窓わし小志

時あたる解下のりて村霽

とれりかたし人の酒

麻さかしのあま

小松のあまをかにあま

當院の冥宝什物

中あも小松との松上

箱の上子馬蹄の硯

松陰の硯の息を志く

せそちよりけりけりけり

三尺の力を西河乃一々

本多総司公より侍所より夜
の雨もひびきかきりけり
のしるをありせよと仰し

蝙蝠や柱を捨つ侍一々

守山の子よりを昔時あり

とりのおろす籠よ玄格

あふいぬを清水に

揚弓あはなる女下りあり

神の猿酒匂ハ格どあり

家こ乃羊也居より大社

大和のりけり

あふいぬを清水に

とりの城の寒きあり

使者指書院へ通るすあり

井波門主應心院殿

あふいぬを清水に

あふいぬを清水に

風や沖より宮守の山の子れ

あふいぬを清水に

あふいぬを清水に

紅雲の下流もありあり

玄格もや祖父のうらみ

と初め者けりありあり

つと綿い鬼の耳をうらぐら

大町新宅

お徳や鈍ついでのお時春

水仙や松ふりや星月夜

雨や新うけし手や狐の尾

控んや何くもはるよ冬舞り

大の聲仰あれを戯子

純汁よ又本物の吐く水

何脈あふ水のもろりや下河原

何れけし藤魚はく白冬を

表戎十九日うらぐら

大黒のうせらる家おそ

酔はめそ大黒あんな夕を

おお板子小判投りり黄浦

糸屋十右衛門宅おそ

巻塚山や都ハ内なる

人妻ハ大根はうりを純汁

お益子鮎も互らすの笑ひ

生煮をあくとりあさけ

世中よ小鼻をよめぬと汁

日本の風呂あらい比叡山

かけぬの浦おのりて

純ひらりとくまら網り

幻住庵とて

雑のの名とてあらあつたを
蕪汁や柔のゆらちもとぬ又

宗隆尼みはつらあま

4那みふて望田つらとて

薬もよまふらる舎やせこの柔

蜜の川蕪おくりやんあたま

秘蔵うは瑞のかも今統六計

純げや祝さのこ寸能戻り

のしりふまぬのあんさ

柳まぐり昔の憲は

霊山ののみち

かおのそりのるまは死ぬ指册

生活新事と上京

新の末乃扇あまのり

聖のいさのやあけ

源流は徳者るん畑の

はあて

神楽ふゆとあまのそ舟乃中

志りくもやれ 枯み乃夕附日
周旋もあて

のひら三井の二王や冬も立
風や勢田の小橋乃花を溜
芭蕉翁をたえまのそ

お指をさみかりさ運やむりき
石菖の房もあれはあやしの若
か生のいふのふしをなして

繕うも然子よいらしく張像はを
むしせ世の童翁や奥子お着

起出てる志けり方や足袋は中
寐んやころりあそこのさめを中
孫子着てくろ路中もこけし

長途狂信
糸の子をなほる旅もや大井川
目ぼりのき氣おし 路中の橋せぬ
山をわあつせら色はの月をき
海をふくむお隣をさめれきり
け木やや頼のさしてあまの月
果はや二をあまて 京原夜

新宅二句

何の場もあはれぬし炭俵
前もいやはしやんを象

きよあ三十五りよ

おほのくはあはれぬ袖を納豆汁

霜月朝日の例を

法人や嵐芝居をを象

好柳の市庄

人をたしめぬのもおも夕涼

新うせや曉いさむ下邨の橋

お豊老父七中のおん平

白河の海をかきとれ桐火桶

幡別あちあち一僧のすき

あつ六十年の紫花を灘

沼子きいてて終りを取

はるるに神をまゝとら

や一筆はるるあしき

栗飯の焦て白あや栗の声

法雲寺老僧春色とほりり

原げのや栗吹の家の庚講

はひり片を指家住あいろし
蟻のふし白のこもや糸の菊
控らんるの切やそて火打
鬚の糸木賊のひと糸板より

炭のとう其根うをけを構
咆りのうせ貝を蓋あしてたを
とをなむくらりよせて
炭賣の炭くくくくくくくく
柯求者しののう向
山茶をや縮のれくらい盛物

あく陣所しややまの原のうと
みくれて木神ははるあはれ
山火をうう噴出に雲まのう
みくはしんがはくくく池のう

寒草画讚

あふやしくれ家いそけおの解
氷もし蓋とららと 鴛の中

住吉しん

草のひをよより流すや冬の海

月防のちを方ある人まで改
る行もよ一生非ありひる事
をあら板らとあやとや
この中よりやけらあ
ひらひ出さる

火燧うら青磁の鉢を拾り

斤のちあを
あつちあを

志高と吹まらわら火鉢のふ

名もこのりらあ
新し

炭よりみ話のぬり
手標

三年成乾の圃み

燭のや汗をよあを金の甲

並 炭竈三句

炭や子の猫をゆしん登のさ

炭もや珍木飛井、ちの松

炭よりや隙のほお鼻をん

炭竈や煙をぬけた猿の声

かすすも其木あより後り

うつし火の南をきけやあ

地男も辛やく人ら 其薫に

炭屑ふいやりあるふ

とてあかの一車とあめ炭

寒蠅炉をめぐらる

懐おれをふるふるあるくわの塩

口切や袴のひびくは流薩葡

梅津某秋田へ良かき
粘聖の宿まで送付す

くま春を愛ふつゝ一組代書

末尾守慰

まゝ雪の幅を裁きぬや灰せり

山中 高容

袷巻の松みきさや三種のぬ

並肩はひき子の蹴や寒作り

斗ふは驚ふつくこけりあんち

冬川や篠のすゝく仲の糸

雨倚橋

うけしゆや澄もあつ橋柱

腰幅や氷の中よあつり松

靴一いつりあつりあつり

煮ゆや箕子の竹乃くす蹴

弟女

内務の古酒をぬらや室の梅

市隅の備く

宮さまをばしあはまを矢念賣

揚屋のおおきおなごはあ
鴨の色をわすれなごころ

鴨の色や 筑紫の食はたすけ

心もや 釜のゆらゆらあそび

浦瀬のしと ぬれ石と 大津崎

細衣のよと たらふく 佐の古巻

塩糖子や 投てくも 小磯洲

よき日 初よ月のくーあや びつ橋

妹もよ 小瓶の 運のちあふり

薩摩山とて

汐波の 猿首と 波のあもり

所々 鷹のつと 蛇う 菜の舟

京なるんは 案内して

京伊引の 飛は いたし 三やと

滝只の ちい 捨て 池の 智

京侍の 溝 月次

沖の 帆も 十の 三を や 候ふる

あ 國 橋 上 三可

兜の 舞の あし たり や 寒く 念ふ

おん 念ふ 橋を こめれ 花の ち

酒飯の 味 酒は けり ぶを 念ふ

去来家まじ

千々々らか海河を舟か

ことく九ぬそくやじし海和

南都よあつらふ

寒色や南大門 乃ふ徳月

ひらら帯のなかりりあを

かりひよのせはりそく

とれとら海船すんで里津棠

お神楽の鼻息息の面の内

雪買ふちを沽さや雪の音

清おぬゆめをりて

あしし雪の舞音の目れ気色

知恩院所ふ宿とりて

初雪よあつらふらうの音うさ

大津よあつらふ

雪の目や船院との顔の色

ひららこの宿あて

馬りよ貧子りし 雪の宿

寒山のこし

ゆら恩よ門の雪はくを食外

西運寺興行

初方ふ人ものるるの伏ん舟
 赤雪とあまの川程一笠のうへ
 ちんやちや赤子あんずる お節
 はりちや 雀の枝おの小土意
 門とりの字を留く

るふ炭はをへぬけ雪の門

舞屋

窓鏡のうき世をぬにゆきんり

官城御普請成終るを詠家
 侍褒美ぬりもける出

陪臣ハ朱買臣之申す乃袖

芭蕉を語をさしと

表老ハ益もあけは 庵のち

川のち梅河のやまをいせり

山居の傍り

雪をぬえ猿茶を煮たりた山

かま川は一あれとちみくち

釈かたより 路も雪の黒木りか

ちんやちやちんやのあはれ
 ちんやちやちんやのあはれ

醉吟

雪うしちややりのちりす小忌衣

望叡山

為雪や大の字枯る山の草

戸障子りか。い雪し松乃声

か、か、竹田、帰る、山、の、雪

旅、女、土、作、を、お、も、く、ら、

黒塚の客あしらふや 国乃雪

立徘徊

げつ雪や内はぬさうか人々誰

めつしいあふ海おん垣あふ

鴨川の雪を秩輪よ。雪らんりふ

雪月、未、風、舟、の、雪、に、雪

頭師方より雪らんめらうを
あふさ上

初雪を物やえらるる雪もあ

楠の砲壺四回一回とらや

万客の唇をうらみせ

まつ雪や湯の之所の大砲壺

ぬもすきい川とまわりの

半袴の別添もあや雪の松

人も来ぬる独酌

初雪や十五成る枝酒の雪

軍兵を園はてまつるや雪磔

松の芳雪よつこの松よりきり

前より雪のふり
畝の人のあはれ
おきかぬ魚のこころ
出づる

すきくぬを拂ふ袖の雪

あまの歌

あまの歌や控を何るふ雪の宿

市中深

初雪や門を閉る夕ちりき

不分當春作病史

酒を病を悟る

極月十日西の大地の月

いとほしや足袋賣子

新堰にて食らふやうの師走

餅礼や灯をともす

餅と鹿と宿はきこく

やうを又や狭き道のり

書如くをゆとり一斗の巻柱

座右銘

以て事や成る事なり取らざる覺書
乳母ふえて去るも養女年忘
柳翁の中百殿よあはれん
のりおの中子眠ぬ

年忘刘伯倫を向かい違て

震渡流火志つすめて

妹と子也薑とけて餅の番
煤掃てぬいぬる女房めつりや

一京中一巻をさるる年
かりの柳子回すあり

以て年の牛はひらり年あさる
臘鬼五つの子を産り樊中
やしあをいしてあはれん
可きといひ

年をさるる鬼は親へ焚ぬ豆
すけつひ柳と宛てせ控
童ふら志とる院中や煤をい
忠信ら芳野仕とやあはれん

有かしの親の悟氣もあはれ

雨窓より羽帯をぬき
煤こもるとつもれた人の陸岸
鼻を掃孔雀の玉や煤こもると
御煤、翁ハ竹取

千山室より高小
刻すともやしと女神楽男より
揚るる餅房して
意の手差紙巻をぬく人々

舟の市せれをあらわし羽織とみ
小紙城行てあかこころ一紙巻
山陵のま方をぬすく人々
女子の抱膝しつらあや
餅の粉や必雪くると神の味
はあふむり清無り巻袖
系あけらなをあげると赤紫
市隅
弱法師家門ゆると餅の札
鳩羽屋の夕日志らけし手紙巻

糸と松あきの市の夕な

自海 三十

子さのいへきあうきさの馬

大津譯

千觀のころもせりやとらる

雪窓

損料の史記をゆききの雪ふ
卒の服やひらめのむねの物思
以事や終評定しあゆを

